

中国の対 ASEAN 貿易の新局面 ～ 2015 年以降の変化を中心に～

大泉 啓一郎¹・宮島 良明²

A new phase of China's trade with ASEAN
—Focusing on changes since 2015—

Keiichiro OIZUMI・Yoshiaki MIYAJIMA

はしがき

本稿の目的は、2000 年以降の中国 ASEAN 貿易の特徴を示すとともに、近年（2015 年以降）の変化を提示することである。

21 世紀に入って中国経済の躍進は目覚ましく、貿易拡大を通じて国際経済に強い影響を及ぼしている。

中国の経済規模を名目 GDP（ドルベース）で見ると、世界経済に占めるシェアは2000年の3.5%から2021年には18.8%へと大幅に上昇した（IMF 2022）。この過程で中国は、2010年に日本を追い抜き世界第2位の経済大国になった。さらに、2030年代にはアメリカを追い抜いて、中国は世界最大の経済大国になる見込みである（日本経済研究所 2022）。

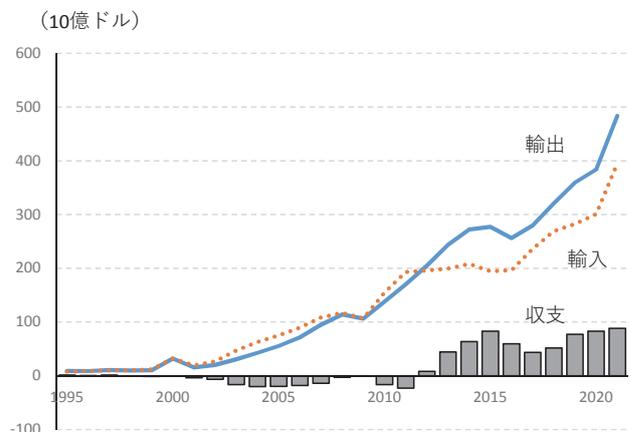
東アジアにおいても、中国はプレゼンスを急速に高めている³。

東アジア全体の経済規模を100%とした場合、中国経済のシェアは2000年には15.5%に過ぎなかったが、2021年に60.8%に上昇した。IMFの見通しでは、2027年にはさらに65.5%に上昇する見込みである。他方、日本のシェアは同期間に62.6%から17.2%に低下している。

同時に、中国は国際貿易の面でも地位を高めている。

中国の貿易額（輸出入の合計額）は、2000年の4743億ドルから2021年には6兆515億ドルに約13倍に増加した。世界貿易に占めるシェアで見ると、同期間に3.6%から13.5%と10ポイント近くも上昇している。2017年以降、中国は世界最大の貿易国である。

東アジア域内においても同様に域内貿易（輸出ベース）におけるシェアをみると、2000年の32.5%から2021



第1図 中国の対 ASEAN 貿易の推移
(資料) UNCTAD STAT から大泉作成。

年には65.7%に上昇しており、他方、日本のそれは同期間に42.5%から20.5%に低下した。東アジアの域内貿易の中心が日本から中国に移行したといってもよい⁴。

このなかで大きく拡大しているのが、中国 ASEAN 貿易である（第1図）。中国の対 ASEAN 貿易は2000年の640億ドルから2021年には8790億ドルへ14倍近く増加した。中国と ASEAN 諸国の間では、2005年に「ASEAN 中国包括的経済協力枠組協定」が締結され、「ASEAN 中国自由貿易協定 (ACFTA)」が発効されており、2015年には双方の関税は原則撤廃されている。2022年1月には RCEP（地域的な包括的経済連携）協定が発効され、この関係はさらに緊密化することが予想される。

中国の貿易拡大は、アメリカとの間では政治問題に発展しているものの、ASEAN との間では、大きな問題は生じていない。一見、競合する輸出品目が多いため、当初は競合すると考えられていたが、中国 ASEAN 貿易は

¹ 亜細亜大学アジア研究所教授

² 北海学園大学経済学部教授

³ 本稿では、東アジアは、日本、韓国、中国、台湾、香港、ASEAN 加盟 10 カ国とする。

⁴ 中国の域内貿易のシェアは、（中国から東アジア域内への輸出＋東アジア域内から中国への輸出）／東アジア域内の総輸出、で計算した。

安定的に拡大してきた。この点について、筆者らは、異なった品目が取引される「垂直貿易」と、同じカテゴリに属する品目が取引される「水平貿易」があり、双方が均衡することによって共栄関係が維持されてきたことを示した（宮島・大泉 2008、宮島・大泉 2018）⁵。

筆者らが、中国 ASEAN 貿易の構造分析として「水平」と「垂直」という2つの形態に注目したのは、2000年代以降著しい中国経済の躍進のなかで、ASEAN で生じた「中国脅威論」についての評価軸を設けなかったからである。当初、多くの輸出品目が重複するため ASEAN の輸出を阻害する、安価な中国の工業製品が ASEAN に流入し、貿易収支が悪化するなど、ASEAN 側にさまざまな懸念が生じた。

しかし実態は先にみたように「脅威」ではなく「共栄」ともいえる関係が築かれている。

この点について「水平」の観点では、2000年代以降、パソコンや携帯電話などの IT 関連製品の世界レベルでの普及を背景にした、分業体制における立ち位置を明確にすることができる。これらの製品は、モジュール化された部品を組み合わせるといった特性を持つことから、東アジア域内では国境を越えた「工程間分業」が進んだ。そのなかで中国と ASEAN の関係を「水平」貿易の視点から評価できると考えたのである。

他方、中国の工業化にともなって、ASEAN からの原材料、一次産品輸出が増加した。このような ASEAN が中国の原材料供給地としての役割をさらに高めようとしていることを「垂直」型の分業として、前述の「水平」型の分業とは区別して論じる必要があると考えた。

ただし、筆者らの最終的な観察は2015年であり、その後の中国経済の躍進が著しいことを考えると、この共栄関係の変化を確認することは、今後の中国 ASEAN 貿易を展望するうえでも重要であろう。もちろん、中国 ASEAN の貿易関係は、各国の貿易戦略の方向性、外国企業の戦略のあり方、地場企業の成長などにより変化する。さらに、近年は、中国の賃金の急上昇と技術水準の向上、米中貿易摩擦と貿易面での安全保障政策の進展、コロナ禍に原因するサプライチェーンの見直しなどの新しい要因が多々議論されている。

この点を踏まえて、本稿は、2000年以降の中国 ASEAN 貿易の特徴を確認するとともに⁶、近年（2015年以降）の変化を見いだすことにも注力した。本稿では、

⁵ 中国と ASEAN の共栄関係を具体的に支えるものとして、多国籍企業の工程間分業（企業内分業）が寄与したという見方がある。ただし、工程間分業が主となる工業製品、なかでも電子・電機製品の取引は、中国 ASEAN 貿易の共栄関係のすべてを説明するほどの規模をもたない。

貿易データは、主に UNCTADSTAT を用いた⁷。品目の評価には UNCTAD の独自の区分と SITC（3桁）を使用した。また、中国側の輸出入データを基本として使用した。

本稿の構成は以下の通りである。

第1節では、2000年以降急拡大する中国の貿易と東アジア域内貿易におけるその立ち位置を確認した上で、中国 ASEAN 貿易の特徴と変化を導き出す。第2節では、貿易特化係数（産业内貿易指数）を用いて、垂直分業と水平分業の観点からその特徴と変化を示す。第3節では、近年の変化として中国の対ベトナム貿易を取り上げる。

なお、本稿の基盤となる調査・研究は、科研費「米中貿易摩擦とコロナショックが東アジア地域の生産ネットワークに与える影響」（21K12434 2021～2023年 代表者：宮島良明）の支援を受けている。

第1節 中国の貿易における対 ASEAN 貿易のポジション

1. 中国の貿易

本節では、中国の貿易における対 ASEAN 貿易の位置づけを確認する。1) 中国の貿易の変化を概観し、2) 東アジアの域内貿易での中国の立ち位置を確認した上で、3) 対 ASEAN 貿易の特徴を整理する。

中国の輸出は、2000年の2490億ドルから2021年には3兆3640億ドルに約14倍に増加した。これに伴い、世界輸出に占めるシェアは3.9%から15.1%に急上昇した。2009年以降、中国は世界最大の輸出国である。2021年において第2位はアメリカの1兆7546億ドルであり、その差は2倍に達しようとしている。

中国の主要輸出品目は工業製品である。2021年において輸出全体に占める工業製品の割合は93.5%を占める。その輸出額は、2000年の2190億ドルから2021年には3兆1420億ドルに増加し、世界の工業製品輸出に占めるシェアは同期間に4.0%から20.9%に上昇した。ちなみに、2021年において第2位のドイツのシェアは9.0%にすぎず、その差は2倍を超える。中国が「世界の工場」と呼ばれる所以である。

UNCTADSTAT は、工業製品を「化学製品」、「機械・輸送機器」、「その他の工業製品」の3つに区分している（第2図）。この区分に従えば、2021年の輸出は、化学製

⁶ 筆者らのこれまでの研究では、貿易データは HS コード（Harmonized System Code）を使用していたが、本稿では長期間の分析が可能な SITC（The Standard International Trade Classification）を使用することとした。

⁷ https://unctadstat.unctad.org/wds/ReportFolders/reportFolders.aspx?sCS_ChosenLang=en



第2図 UNCTADSTATによる工業製品の分類より大泉作成。
(資料) UNCTADSTAT から作成。

品が2642億ドル、機械・輸送機器が1兆6220億ドル、その他工業製品が1兆2570億ドルであった。世界輸出に占めるシェアは化学製品の輸出が9.7%とドイツ、米国に次ぐ第3位であるものの、機械・輸送機器は21.2%で2009年以降世界第1位、その他の工業製品も26.9%で2002年以降世界第1位である⁸。

UNCTADSTATは、機械・輸送機器を、さらに「電子・電気製品(中間財を除く)」、「電子・電気製品の中間財」、「その他の機械・輸送機器」の3つに区分している(前掲第2図)。

2021年において、「電子・電気製品(中間財を除く)」の輸出は3403億ドルで、世界のシェアの42.1%と圧倒的に多い(ちなみに第2位が香港4.8%)⁹。また、「電子・電気製品の中間財」は金額では6244億ドルと多く、世界の24.9%を占める。これら電子・電気製品を除く「その他の機械・輸送機器」は1257億ドルで、2021年は前年比38.7%と高い伸びを記録し、ドイツを抜いて世界第1位になった。

他方、中国の輸入は、2000年の2250億ドルから2021年には2兆6840億ドルと約10倍に増加し、世界輸入に占めるシェアは3.4%から11.9%に上昇した。現在、中国は世界第2位の輸入国である。ちなみに第1位はアメリカの2兆9370億ドル(13.0%)である。

中国の輸入においても主要品目は工業製品である。しかし、2021年において輸入全体に占めるシェアは57.8%と輸出に比べると低い。また長期的にみると、2000年の75.1%から一貫して低下傾向にある。ただし、金額ベースでみると、2000年の1690億ドルから2021年に1兆5500億ドルに10倍近くも増加しており、世界に占める割合は、同期間に3.5%から10.2%に上昇した。2009年以降、世界第2位の工業製品の輸入国である(第1位はアメリカ)。

次いで、輸出の場合と同様に、UNCTADSTATの区分に従って工業製品の輸入を整理する。2021年の「化学製品」の輸入は2620億ドル(世界に占めるシェア9.3%)、「機械・輸送機器」は1兆80億ドル(同12.7%)、「その

⁸ 「その他の工業製品」に含まれる繊維・衣服関連輸出は、2021年も3255億ドルと多く、世界の34.0%を占める。2021年においても中国の労働集約的産業はいまだ高い競争力を有していると考えられる。

⁹ 2003年以降、世界第1位になっている。

他工業製品」が2810億ドル(同6.2%)と金額は多いものの、輸出に比べて総額は少なく、世界に占めるシェアも低い。

「機械・輸送機器」の内訳をみると、「電子・電気製品(中間財を除く)」は503億ドルであり、輸出の3400億ドルに比べて5分の1にも満たない。これは中国の電子・電気製品が圧倒的な輸出競争力を持っていることを示している。これに対して、「電子・電気製品の中間財」は6280億ドルと多く、世界に占めるシェアも22.8%と高い。この水準は輸出の6244億ドルとほぼ均衡しており、大量の電子・電気製品の中間財を中国が海外と互いに取引していることがわかる。これは、電子・電気産業の工程間分業の進展を示すものである。「その他の機械・輸送機器」は2806億ドルであるが、世界に占めるシェアは6.2%にすぎない。

近年、中国において部品・中間財を含めた工業製品の内製化が進んでいるとの見方がある。たしかに、工業製品の輸出に対する輸入の割合は、2000年の77.1%から2021年には49.3%へと低下傾向にある。そして内製化が進めば、その原材料などを含む非工業製品の輸入が増加するはずである。実際に、非工業製品の輸入をみると、2000年の540億ドルから2021年には1兆1210億ドルに20倍近く増加している。特記しておきたいのは、鉱物資源が2000年の130億ドルから2021年には3870億ドルに30倍近くも増加していることである。2003年以降、中国は世界最大の鉱物資源の輸入国であり、そのシェアは世界の32.2%を占める¹⁰。

2. 中国の東アジア域内貿易

次に、東アジア域内外における中国貿易の特徴について検討する。

戦後、アジア諸国は、アメリカという巨大消費市場への輸出を通じて成長してきた。時間とともに、工業製品の生産工程は、東アジア域内に分散(分業)されるという生産ネットワークを形成してきた(末廣2014、後藤2019)。しかも、そのアクターの数は、日本やNIEsから中国、ASEAN諸国へと増加し、複雑化するという特徴をみた。加えて、主たるアクターが日本から中国に移行していることは、先に示した域内貿易比率の変化からも明らかであろう。

東アジア域内の貿易(輸出ベース)は、2000年の7983億ドルから2021年には3兆8081億ドルに増加した。近年は、通信コストや輸送コストの低下に加えて、IT関連製品などの部品のモジュラー化を背景に工程間分業が細

¹⁰ また鉱物燃料も2000年の210億ドルから4030億ドルに増加している。2016年から世界第1位の輸入国であり、2021年は世界の15.8%を占める。

第1表 中国の域内外貿易

(10億ドル)

	2000	2005	2010	2015	2021
域外輸出	129.4	446.5	1,001.8	1,383.9	2,136.2
域外輸入	96.1	265.7	691.4	868.4	1,453.8
収支	33.3	180.8	310.4	515.6	682.3
域内輸出	119.8	315.5	575.9	889.5	1,226.1
域内輸入	129.0	394.3	704.6	811.2	1,230.5
収支	- 9.1	- 78.8	- 128.7	78.3	- 4.4

(資料) UNCTADSTAT からより大泉作成。

分化された。これに対応してアジア各国政府の投資誘致戦略は、産業全体の誘致というよりも生産ネットワークの一角を占めるような産業の誘致へと視点が変化してきている。

中国も例外ではない。中国の改革・開放政策は、経済特区の設定からスタートしたが、これはアジア NIEs や華僑資本からの直接投資と、それらによる東アジアの生産ネットワークへの参画を期待したものだった。その後、低い賃金コストと誘致策に加え、WTO 加盟を契機に、東アジアの生産ネットワークの最終組立の場へと変化していった(伊藤 2018)¹¹。

中国の貿易における域内貿易の位置づけを明確にするため、以下、域内外の貿易を比較する(第1表)。

中国の輸出を域内外に区分すると、域外輸出は2000年の1290億ドルから2021年には2兆1360億ドルに約16倍に増加し、域内輸出も同期間に1200億ドルから1兆2260億ドルへと10倍近く増加したものの比率は低下した。いずれも増加スピードは速いが、域外の方が金額も伸び率も大きく、輸出に占める域外輸出の割合は同期間に51.9%から63.5%に上昇した。輸入においても、域外輸入は960億ドルから1兆4540億ドルに15倍近くも増加し、域内輸入は1290億ドルから1兆2310億ドルへと10倍の増加と、域外輸入の方が多く、その比率は42.7%から54.2%に上昇した。

そして、収支を域内外に区分してみると、域外貿易の収支は常に黒字であった。その黒字幅は2000年の330億ドルから2021年の6820億ドルへとほぼ一貫して増加している。この域外貿易収支黒字の主な相手先はアメリカであり、対アメリカ貿易黒字は300億ドルから3960億ドルに増加した。これがアメリカと中国の貿易摩擦の原因となった。これに対して、域内貿易の収支はほとんど均衡して推移してきた。ちなみに、2000年は91億ドルの赤字、2021年も44億ドルの赤字であった。

¹¹ 伊藤(2018)は、中国と東アジア地域の関係を、1980～90年代を「アジアが中国を変えた時代」、2000年代を「アジアと共存する中国」、2010年代を「中国がアジアを変える時代」と区分している。

中国の貿易は域内よりも域外の貿易額が多く、その比率が上昇傾向にあり、貿易収支は巨額の黒字を計上しているものの、域外貿易に大きく依存しているわけではない。本節の冒頭で述べた通り、東アジア域内で生産ネットワークが形成されており、その最終生産地域が中国となっていることがこの背景にある。

このことを電子・電気製品でみておこう。先に中国の「電子・電気製品(中間財を除く)」の輸出は世界の42.1%を占めると述べたが、同製品の域外への輸出は71.8%を占め、圧倒的に多い。他方、「電子・電気製品の中間財」の域内からの輸入が90.8%を占める。つまり、域内で中国と東アジア諸国は電子・電気製品の中間財の取引を行う分業があり、中国で最終製品となった電子・電気製品が域外に輸出されていることがわかる。

3. 中国の ASEAN 貿易

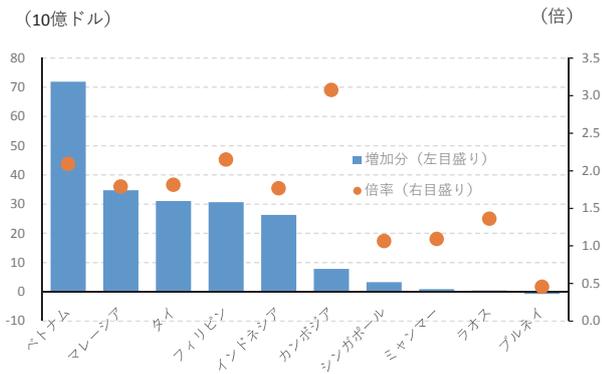
この東アジアの域内貿易(輸出ベース)に占める中国のシェアは2021年には60%を大幅に上回っている。これに対して日本のそれは20%強でしかない。東アジア域内の生産ネットワークにおける中心が日本から中国に変わったとってよい。

このようななかで、中国の対 ASEAN 貿易は増加しているのである。東アジア域内貿易におけるシェアで見ると2000年の4.6%から2021年に17.7%に上昇した。他方、日本の対 ASEAN 貿易のそれは20.3%から5.1%に低下している。

中国の対 ASEAN 輸出は、2000年の140億ドルから2021年には4840億ドルと増加した。中国の輸出に占めるシェアで見れば、5.7%から14.4%に上昇した。2021年において中国の最大の輸出相手国はアメリカの5770億ドル(17.2%)であるが、ASEAN との差は930億ドル(2.8ポイント)にすぎない。ASEAN が中国の主要輸出先になっていることが確認できる。

国別にみると、ベトナムが1379億ドル(28.5%)と最も多く、以下マレーシア(787億ドル、16.3%)、タイ(694億ドル、14.3%)、インドネシア(606億ドル、12.5%)の順となっている。ちなみに2015年の上位5カ国はベトナム、シンガポール、マレーシア、タイ、インドネシアの順であり、シンガポールが第2位から第6位へと大きく順位を下げた。振り返れば、2000年において中国の対 ASEAN 輸出において最大の輸出相手国はシンガポールで33.2%を占めていたが、2021年には11.4%に低下している。他方、輸出相手国として急浮上してきたのはベトナムであり、同期間に8.9%から28.5%となった。

ベトナムの台頭は、近年目覚ましい。2015年から2021年の増加分で見ると、ベトナムが719億ドルと最も多く、第2位のマレーシア(347億ドル)の倍の水準にある(第3図)。2015年と比較して倍率で見ると、カンボジアが



第3図 中国の対ASEAN輸出増加分と倍率
(2015年と2021年を比較)

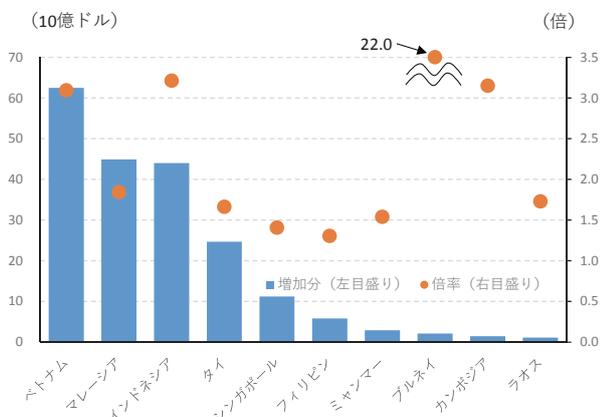
(資料) UNCTADSTAT から大泉作成。

3.1倍と最も高く、次いでベトナムとフィリピンが2.1倍と高い。

これに対して、ASEANからの輸入は、2000年の100億ドルから2021年に3950億ドルに40倍近く増加をみた。中国の輸入に占めるASEANのシェアは4.9%から13.3%に上昇しており、2011年以降、その規模は主要な輸入相手国・地域である日本、韓国、台湾を上回っている。2021年の中国の最大の輸入相手国・地域は台湾の2499億ドル(9.3%)であり、ASEANからの輸入はその約1.6倍である。

国別にみると、マレーシアが982億ドル(25%)と最も多く、次いでベトナム(923億ドル、23%)で、この2カ国でほぼ半分を占める。次いで、インドネシア(639億ドル、16%)、タイ(619億ドル、16%)の順となっている。2015年の上位5カ国は、マレーシア、タイ、ベトナム、シンガポール、インドネシアの順であり、タイとシンガポールが順位を下げていることがわかる。

2015年と比較した増加分で見ると、やはりベトナムが625億ドルと最も多く、次いでマレーシアが449億ドル、インドネシアが440億ドルと多い。2015年と比較して倍率をみると、金額が少ないもののブルネイが22倍と極端



第4図 中国の対ASEAN輸入増加分と倍率
(2015年と2021年を比較)

(資料) UNCTADSTAT から大泉作成。

に高い(第4図)。次いでインドネシアとカンボジアが3.2倍、ベトナムが3.1倍と高い。また、最も倍率が低いフィリピンでさえ1.3倍であり、ASEAN全体が中国市場の拡大の恩恵を受けていることがわかる。

最後に中国の対ASEAN貿易収支をみておこう。全体では、2000年以降、2011年まで赤字が続いていたが、2012年以降は黒字に転換した。これには、ASEANからの輸入が伸び悩んだことが原因している。2015年以降、ASEANからの輸入が再び増加傾向を強めているが、2021年は880億ドルの黒字になっている。もっとも、状況は各国によって異なる。黒字幅では、対ベトナムが456億ドルと最も多く、次いでフィリピンが325億ドル、シンガポールが164億ドルと多い。他方、赤字の国も存在する。マレーシアに対しては195億ドルの赤字であり、そのほかインドネシア(32億ドル)、ブルネイ(16億ドル)、ラオス(10億ドル)で赤字を計上している。

4. 貿易品目の変化

次に中国の対ASEAN貿易の特徴を大区分の品目別から検討する。

対ASEAN輸出では工業製品が圧倒的に多く、2021年の同輸出は4305億ドルと輸出全体の89.0%を占めた。長期的にみると、2000年の80.8%から上昇傾向にある。中国の工業製品の対ASEAN輸出が急増していることがうかがえる。

工業製品の内訳は、「化学製品」は457億ドル(全輸出の9.5%)、「機械・輸送機器」は2043億ドル(42.2%)、「その他の工業製品」は1804億ドル(37.3%)となっており、「機械・輸送機器」と「その他の工業製品」が多いのが特徴である¹²。

他方、対ASEAN輸入では、工業製品の輸入は2000年の130億ドルから2021年に2590億ドルに増加し、中国の工業製品輸入全体に占めるシェアは、7.5%から16.7%と上昇している。ただし、輸入の場合、ASEANからの主要な品目は工業製品だけではない。資源関連の輸入も多いため、ASEANからの輸入全体に占める工業製品のシェアは65.8%から67.0%と変化は小さく、かつその水準は輸出に比べて低い。

特記しておきたいのは、2021年の中国の対ASEAN工業製品輸入の2590億ドルのうち電子・電気製品の中間

¹² 「その他の工業製品」のなかでは「鉄鋼」の輸出が238億ドルと多く、東アジア域内への輸出の50.5%を占める。これは近年の一带一路などに含まれるインフラ整備支援に使用されているものと考えられる。また「繊維・衣料」も502億ドルと増加傾向を強めているが、これは製品と同時にASEANへ繊維の原材料を供給していることを裏付けるものである。

第2表 中国の対ASEAN輸出上位品目（2021年）

(10億ドル、%)

		金額	シェア	1位	金額	%	2位	金額	%
★ 1	776 熱電子管・半導体	38.4	10.0	ベトナム	15.6	40.6	マレーシア	10.4	26.9
2	759 事務用機器の部分品	23.4	6.1	ベトナム	11.0	46.9	マレーシア	3.9	16.6
★ 3	764 通信機器	18.8	4.9	ベトナム	4.0	21.5	タイ	3.5	18.6
★ 4	334 石油製品	12.1	3.2	シンガポール	5.8	47.5	フィリピン	3.6	29.5
★ 5	752 自動データ処理機械	11.7	3.1	シンガポール	4.2	35.8	マレーシア	1.9	16.5
★ 6	778 その他の電気機器	11.6	3.0	ベトナム	4.9	42.6	マレーシア	2.0	16.9
★ 7	772 回路開閉機器印刷回路	10.5	2.7	ベトナム	3.6	34.0	マレーシア	2.4	23.0
8	893 プラスチック製品	10.4	2.7	マレーシア	2.2	21.0	ベトナム	2.8	27.4
★ 9	655 メリヤス・クロセ編物	10.0	2.6	ベトナム	5.2	51.6	カンボジア	2.0	20.5
★ 10	821 家具	8.7	2.3	マレーシア	2.4	27.5	タイ	1.5	17.1
★ 11	699 各種の卑金属製品	8.2	2.1	ベトナム	2.2	26.3	マレーシア	1.5	17.8
12	674 鉄鋼圧延製品（被覆）	7.8	2.0	フィリピン	3.0	38.1	タイ	2.0	25.8
13	728 その他の産業用機械	7.6	2.0	ベトナム	2.9	38.6	マレーシア	1.2	15.7
★ 14	653 人造繊維の織物	7.3	1.9	ベトナム	3.3	44.9	インドネシア	1.1	14.9
★ 15	894 玩具・スポーツ用品	6.4	1.7	マレーシア	1.7	25.8	ベトナム	1.3	20.1
16	541 医薬品	6.3	1.6	インドネシア	2.3	36.6	タイ	0.9	14.8
★ 17	851 はき物	6.2	1.6	ベトナム	1.8	28.4	フィリピン	1.6	25.6
18	582 プラスチックの板・フィルム	5.7	1.5	ベトナム	2.2	37.8	マレーシア	0.8	13.9
19	716 回転式電気機械	5.7	1.5	ベトナム	3.3	57.2	タイ	0.7	12.1
★ 20	793 船舶・浮遊構造体	5.6	1.5	シンガポール	4.0	70.6	インドネシア	0.7	12.9
	その他	261.0	42.0						
	総額	483.5	100.0	ベトナム	137.9	28.5	マレーシア	78.7	16.3

(資料) UNCTADSTAT から大泉作成。

第3表 中国の対ASEAN輸入上位品目（2021年）

(10億ドル、%)

		金額	シェア	1位	10億ドル	%	2位	10億ドル	%
★ 1	776 熱電子管・半導体	84.3	28.0	マレーシア	38.6	45.8	ベトナム	19.2	22.8
★ 2	759 事務用機器の部分品	37.8	12.6	ベトナム	31.6	83.7	フィリピン	2.1	5.5
★ 3	752 自動データ処理機械	17.9	6.0	タイ	11.7	65.1	マレーシア	2.8	15.4
★ 4	335 石油残留物・同製品	11.9	4.0	マレーシア	7.9	66.3	シンガポール	2.3	19.4
5	333 原油	10.0	3.3	マレーシア	8.9	88.5	インドネシア	0.5	4.7
6	321 石炭	9.7	3.2	インドネシア	9.7	100.0	ベトナム	0.0	0.0
★ 7	343 天然ガス	9.0	3.0	マレーシア	4.1	45.4	インドネシア	2.8	30.8
8	322 亜炭・泥炭	8.8	2.9	インドネシア	8.2	93.0	フィリピン	0.6	6.8
★ 9	057 果実・ナット（生鮮・乾燥）	8.4	2.8	タイ	6.2	74.1	ベトナム	1.1	12.5
10	671 銑鉄・フェロアロイ	7.4	2.4	インドネシア	6.9	94.2	ミャンマー	0.4	4.9
11	728 その他の産業用機械	7.3	2.4	シンガポール	5.2	70.8	マレーシア	1.8	25.0
★ 12	422 植物性油脂（その他）	7.1	2.4	インドネシア	5.1	72.1	マレーシア	1.9	26.5
★ 13	874 測定・分析・制御機器	6.2	2.1	マレーシア	2.8	44.6	シンガポール	2.5	39.6
14	672 鉄鋼インゴット・半製品	6.2	2.1	インドネシア	3.8	61.9	ベトナム	1.7	27.8
★ 15	334 石油製品	6.2	2.1	マレーシア	4.0	64.7	シンガポール	1.8	28.8
16	232 合成ゴム	5.3	1.8	タイ	2.1	39.4	ベトナム	2.0	38.0
★ 17	778 その他の電気機器	5.2	1.7	マレーシア	1.5	28.9	フィリピン	1.3	25.5
18	682 銅	4.7	1.6	フィリピン	1.2	25.8	マレーシア	1.1	22.5
19	511 炭化水素・同誘導体	4.6	1.5	ブルネイ	1.7	36.6	シンガポール	1.2	25.2
★ 20	764 通信機器	4.5	1.5	ベトナム	2.9	64.2	タイ	0.8	18.8
	その他	132.6	12.7						
	総額	395.2	100.0	マレーシア	98.2	24.8	ベトナム	92.3	23.4

(資料) UNCTADSTAT から大泉作成。

財が1310億ドルと半分以上を占めることである。これは、中国とASEANとの間で電子・電気製品の分業体制が形成されていることを含意するものである。そして、それはまた、中国ASEAN貿易が電子・電気製品の生産ネットワークの情勢変化の影響を受けやすいということも意味するのである¹³。

2021年の工業製品の輸入においてもベトナムが770億

ドルと最も多く、ついでマレーシア、タイの順になっている。2015年からの変化をみるとベトナムの躍進が著しい¹⁴。

第2表、第3表は、2021年の中国の対ASEAN輸出入

¹³ この点について丸川（2018）が「集積回路モノカルチャー」として、その脆弱性リスクを指摘している。

上位 20 品目と、その主要輸出入国（第 1 位と第 2 位）を整理したものである。輸出において工業製品でのベトナムの躍進が明らかである。

また、図表左端に★を記した品目は 2015 年においても上位 20 品目にランクインした品目である。★のない品目が多く、輸出入ともに主要品目が近年大きく変わっていることが確認できる（輸出で 7 品目、輸入で 9 品目）。これは ASEAN 側の変化と捉えるよりも、中国の産業構造の高度化に影響を受けたものだと考えるべきだろう。たとえば、2021 年に輸出の第 2 位になったのは、「759 事務用機器の部分品」であるが、これは中国の電子・電気製品の中間財の競争力が向上したことを意味している。また、輸入において 5 位に「333 原油」、6 位に「321 石炭」がランクインしており、資源関連の増加、そのなかでもインドネシアからの輸入がその中心となっていることが確認できる。

これらのことから、2015 年以降の特徴の一つとして、中国と ASEAN の貿易が、電子・電機製品の中間財を中心とした「水平分業」と、中国の競争力ある工業製品（例えば鉄鋼など）と ASEAN の競争力のある資源関連製品の取引という「垂直分業」によって支えられていることが推測できる。

では、この二つの分業が、2000 年以降どのように変化してきたのかを、次節で検討することにする。

第 2 節 中国 ASEAN 貿易の構造変化

1. 分析方法

前節では、2000 年以降中国経済が発展するなかで、中国と ASEAN の貿易額が、持続的に拡大してきたことをみた。その収支も比較的安定していた。本節では、これら中国の対 ASEAN 貿易が安定的に推移してきた背景と特徴を分業の観点から明らかにする。

分析の方法は、宮島・大泉（2008）、宮島・大泉（2018）で用いた手法を援用する¹⁵。

この分析手法は、品目ごとに計算した貿易特化係数（産業内貿易指数）から貿易構造の変化を観察し、分析を行う点に特徴がある。

具体的には、1 品目ごとに貿易特化係数（産業内貿易指数）を算出し、その値により各品目を 5 つのカテゴリに分類する。そして、カテゴリごとの総貿易に占めるシェアを求め、水平型の貿易と垂直型の貿易の割合を求める、というものである。

データは、UNCTADSTAT の SITC3 桁（259 品目）の品目別データを用いた。そして、2000 年から 2021 年の中国の対 ASEAN 貿易についての貿易特化係数による貿易構造の分析（第 5 図）、貿易特化係数によるカテゴリごとの上位 5 品目の変遷（第 4 表）、「水平型」と「垂直型」それぞれの貿易額の推移（第 6 図）を確認することで、2000 年代以降の中国と ASEAN の貿易の特徴について考察を行った。

本節において分析の中心となる貿易特化係数（産業内貿易指数）については、以下の式により求められる。

（品目ごとの）貿易特化係数＝

$$\frac{\text{中国の対 ASEAN 輸出額} - \text{中国の対 ASEAN 輸入額}}{\text{中国の対 ASEAN 輸出額} + \text{中国の対 ASEAN 輸入額}}$$

貿易特化係数は、その数式の特性から 1 から -1 の値をとる。その値が 1 に近いほど、中国が一方的に ASEAN へ輸出している品目であるということの意味する。換言すると、この品目の中国の ASEAN からの輸入額はほとんどないと考えられるので、中国が ASEAN に対して相当に強い競争力を持つ品目ということになる。逆に、-1 に近い値を取る品目は、ASEAN が中国に競争優位を持つ品目ということになる。

それでは、貿易特化係数の値が、「0」に近くなる場合はどうか。ここが私たちの研究のもっとも重要なポイントとなる。この「0」近辺の値には、2 つの意味合いがあると想定される。

1 つは、中国の輸出額と ASEAN の輸出額（中国の輸入額）が拮抗している場合である。この場合、分子がゼロに近づくので、係数の値もゼロに近づくこととなる。

もう 1 つは、双方の輸出入の貿易額が大きい場合である。この場合は、分母が大きくなるので、係数の値そのものは小さくなる。

これらが含意するところは、いずれの場合も、中国と ASEAN が相互に輸出入している貿易品目ということであり、どちらか一方がとくに強い競争力を持つものではないということである。また、同じ品目番号の製品を相互に貿易するということは、その生産の過程になんらかの関連性、すなわち国境を越えた「分業」が進展していることが強く推測できる。もちろんその産業の性質にもよるが、最終財と中間財の貿易や、また同一企業内の国境を越えた工程間分業、いわゆる企業内貿易などが含まれると考えられる。

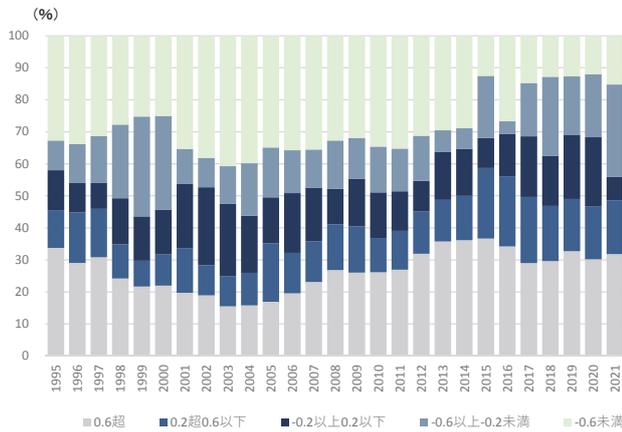
これらのことを念頭に、ここでは中国と ASEAN の全貿易品目を、その貿易特化係数の水準により以下の 5 つのカテゴリに分類した。

①中国が輸出に特化した品目（0.6 超）

②中国がやや輸出に特化した品目（0.2 超 0.6 以下）

¹⁴ 2015 年のベトナムからの工業製品の輸入は 190 億ドルで、マレーシア、タイ、シンガポールに次ぐ第 4 位であった。

¹⁵ この分析手法は、吉富（2003：274～279）からアイデアを得たものである。



第5図 中国とASEANの貿易構造：産業内貿易指数による分類ごとの割合の推移（貿易総額を100とした）
（資料） UNCTADSTAT から宮島作成。

- ③特化してない品目（- 0.2 以上 0.2 以下）
- ④ ASEAN がやや輸出に特化した品目（- 0.6 以上 - 0.2 未満）
- ⑤ ASEAN が輸出に特化した品目（- 0.6 未満）

この分類に基づいて、貿易総額（輸出額+輸入額）に対するシェアをカテゴリごとに合算し、その推移を示したのが、第5図である。

上部と下部の色の薄い部分は、それぞれ「⑤ ASEAN が輸出に特化した品目（- 0.6 未満）」と「①中国が輸出に特化した品目（0.6 超）」を示している。この両者は、前述したとおり、中国と ASEAN のどちらかが一方的に優位（特化している）な貿易品目と考えられるので、「垂直」型の貿易とみなすことができよう。反対に、中央の色の濃い部分は、上からそれぞれ「④ ASEAN がやや輸出に特化した品目（- 0.6 以上 - 0.2 未満）」、「③特化してない品目（- 0.2 以上 0.2 以下）」、「②中国がやや輸出に特化した品目（0.2 超 0.6 以下）」を示しており、相互に同じ分野の品目を輸出入しているということから、「水平」型の貿易としてグループ化できる¹⁶。

2. 2000年以降の水平型と垂直型の貿易割合の変化

次に、2000年以降、水平型と垂直型のそれぞれの割合がどのように変化してきたのかについて、前掲第5図より確認する。

2000年に「①中国が輸出に特化した品目（0.6 超）」の割合は全貿易の21.9%、「⑤ ASEAN が輸出に特化した品目（- 0.6 未満）」の割合は同25.1%であった。これらを合算した垂直型に分類されるものが47.0%であった。他方、水平型とみなせるものは、「②中国がやや輸出に特

化した品目（0.2 超 0.6 以下）」の割合が同9.7%、「③特化してない品目（- 0.2 以上 0.2 以下）」が同14.0%、「④ ASEAN がやや輸出に特化した品目（- 0.6 以上 - 0.2 未満）」が同29.3%となり、これらを合算すると53.0%となる。

2000年以後、その割合は若干小さくなったものの、2000年代の前半は、水平型（色の濃い部分）の貿易が、45%前後と比較的高水準で推移したのが特徴であった。2000年代後半になると、この水平貿易の割合は低下傾向をたどり、2010年には39.2%、2014年には35.0%となった。そして、注目すべきは、2015年以降、再び水平貿易の割合が増加傾向をたどっていることである。2015年には50.9%、2020年には57.7%、直近の2021年には53.0%となった。

一方、垂直型（色の薄い部分）の割合は、上記の水平型のそれと反対の動きとなるので、2000年代前半に55%前後で推移したのち、2000年代後半に増加傾向を示し、そして、2015年以降は、縮小傾向に転じた。

ただし、垂直型において、それを構成する「①中国が輸出に特化した品目（0.6 超）」（下の色の薄い部分）の割合と、「⑤ ASEAN が輸出に特化した品目（- 0.6 未満）」（上の色の薄い部分）の割合、それぞれの推移に特徴的な動きがみられる。

具体的に確認すると、2000年の「①中国が輸出に特化した品目（0.6 超）」の割合は、2000年が21.9%、2005年が16.9%、2010年が26.1%と、2000年代はそれほど高水準ではなかったが、2010年代に入ると、2015年に36.6%、2020年に30.2%、2021年には31.7%とその割合は上昇している。

逆に、「⑤ ASEAN が輸出に特化した品目（- 0.6 未満）」の割合は2000年に25.1%であったが、その後、2005年に34.9%、2010年には34.7%と、2000年代を通して35%前後で安定的に推移した。

しかし、2010年代に入ると徐々にその割合は減少し、2015年には12.5%、2020年には12.1%、2021年には15.2%となった。2015年以降、とくに ASEAN 優位の割合が小さくなる傾向がみてとれるが、具体的な貿易品目の変遷については、次項で確認を行う。

3. カテゴリ別の貿易額上位5品目

本節では、ここまで貿易特化係数から水平型と垂直型に区分して、2000年以降の中国と ASEAN の貿易構造について分析を試みてきた。さらに、ここでは、具体的な貿易品目の変遷を確認することで、中国 ASEAN 貿易の内容について検討を行う。そのために、第4表には、上述した貿易特化係数による5つのカテゴリごとに、貿易（輸出入）額が多い5品目をリストアップし、2000年、2010年、2015年、2021年の変化をみた。

¹⁶ 吉富（2003）は、付加価値ベースでの貿易品目の分析により、アジアの場合、水平分業のなかにも、「垂直的」なものが多いと指摘している。

第4表 カテゴリ別の貿易額上位5品目の変化（単位：100万ドル、%）

0.6超

	2000			2010			2015			2021		
	品目名	金額	シェア	品目名	金額	シェア	品目名	金額	シェア	品目名	金額	シェア
1	785 二輪自動車・自転車	772	2.0	793 船舶・浮遊構造体	6,325	2.2	793 船舶・浮遊構造体	7,966	1.7	764 通信機器	23,251	2.7
2	653 人造繊維の織物	463	1.2	821 家具	3,749	1.3	676 鉄鋼の棒・形鋼	7,397	1.6	893 プラスチック製品	10,804	1.3
3	044 とうもろこし	370	0.9	871 光学機器	3,255	1.1	653 人造繊維の織物	6,562	1.4	655 メリヤス・クロセ編物	10,249	1.2
4	652 綿織物	311	0.8	652 綿織物	2,614	0.9	821 家具	6,198	1.3	821 家具	9,043	1.0
5	763 録音機器	308	0.8	653 人造繊維の織物	2,223	0.8	655 メリヤス・クロセ編物	4,953	1.1	699 各種の卑金属製品	8,454	1.0

0.2超0.6以下

	2000			2010			2015			2021		
	品目名	金額	シェア	品目名	金額	シェア	品目名	金額	シェア	品目名	金額	シェア
1	764 通信機器	1,827	4.6	764 通信機器	11,574	4.0	764 通信機器	26,752	5.8	334 石油製品	18,297	2.1
2	771 電力用機器	347	0.9	771 電力用機器	2,591	0.9	778 その他の電気機器	9,797	2.1	778 その他の電気機器	16,750	1.9
3	893 プラスチック製品	192	0.5	716 回転式電気機械	2,295	0.8	334 石油製品	9,533	2.1	772 回路開閉機器印刷回路	14,928	1.7
4	899 その他の種々の製品	181	0.5	741 エアコン	2,050	0.7	772 回路開閉機器印刷回路	7,557	1.6	851 はき物	10,198	1.2
5	054 野菜（生鮮・冷蔵・冷凍）	107	0.3	743 空気ポンプ・圧縮機	1,822	0.6	851 はき物	6,079	1.3	598 その他の化学工業生産品	7,410	0.9

- 0.2以上0.2以下

	2000			2010			2015			2021		
	品目名	金額	シェア	品目名	金額	シェア	品目名	金額	シェア	品目名	金額	シェア
1	334 石油製品	1,737	4.4	334 石油製品	14,163	4.8	752 自動データ処理機械	16,008	3.4	728 その他の産業用機械	14,910	1.7
2	778 その他の電気機器	672	1.7	778 その他の電気機器	4,591	1.6	057 果実・ナット（生鮮・乾燥）	5,699	1.2	651 紡織用繊維の糸	6,476	0.7
3	716 回転式電気機械	443	1.1	772 回路開閉機器印刷回路	3,961	1.4	054 野菜（生鮮・冷蔵・冷凍）	4,269	0.9	575 その他のプラスチック	6,107	0.7
4	057 果実・ナット（生鮮・乾燥）	300	0.8	054 野菜（生鮮・冷蔵・冷凍）	3,043	1.0	651 紡織用繊維の糸	4,003	0.9	641 紙・板紙	5,799	0.7
5	741 エアコン	252	0.6	728 その他の産業用機械	2,496	0.9	682 銅	2,291	0.5	574 ポリエーテル重合体	4,033	0.5

- 0.6以上 - 0.2未満

	2000			2010			2015			2021		
	品目名	金額	シェア	品目名	金額	シェア	品目名	金額	シェア	品目名	金額	シェア
1	776 熱電子管・半導体	4,403	11.2	752 自動データ処理機械	22,051	7.5	776 熱電子管・半導体	63,394	13.6	776 熱電子管・半導体	122,750	14.2
2	759 事務用機器の部分品	2,709	6.9	759 事務用機器の部分品	8,361	2.9	759 事務用機器の部分品	8,743	1.9	759 事務用機器の部分品	61,227	7.1
3	752 自動データ処理機械	1,604	4.1	898 楽器・レコード	2,296	0.8	575 その他のプラスチック	3,687	0.8	752 自動データ処理機械	29,643	3.4
4	772 回路開閉機器印刷回路	846	2.1	575 その他のプラスチック	2,220	0.8	763 録音機器	3,673	0.8	057 果実・ナット（生鮮・乾燥）	12,234	1.4
5	651 紡織用繊維の糸	429	1.1	874 測定・分析・制御機器	1,936	0.7	874 測定・分析・制御機器	3,662	0.8	874 測定・分析・制御機器	9,169	1.1

- 0.6未満

	2000			2010			2015			2021		
	品目名	金額	シェア	品目名	金額	シェア	品目名	金額	シェア	品目名	金額	シェア
1	333 原油	2,419	6.1	776 熱電子管・半導体	51,218	17.5	335 石油残留物・同製品	7,723	1.7	335 石油残留物・同製品	12,295	1.4
2	634 ベニヤ・合板	693	1.8	321 石炭	5,729	2.0	422 植物性油脂（その他）	4,459	1.0	333 原油	10,702	1.2
3	251 パルプ・くず紙	608	1.5	231 天然ゴム	5,622	1.9	343 天然ガス	4,253	0.9	321 石炭	10,023	1.2
4	641 紙・板紙	604	1.5	422 植物性油脂（その他）	5,510	1.9	231 天然ゴム	3,859	0.8	343 天然ガス	8,971	1.0
5	231 天然ゴム	572	1.4	333 原油	3,661	1.3	571 エチレン重合体（一次製品）	3,334	0.7	322 亜炭・泥炭	8,822	1.0

（資料） UNCTADSTAT から宮島作成。

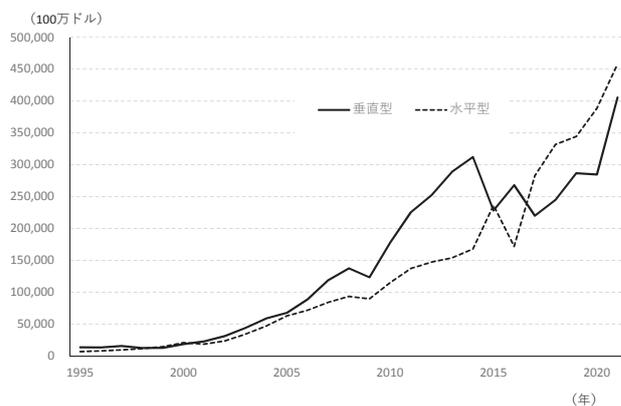
2000年のそれぞれの第1位の品目を見ると、「①中国が輸出に特化した品目(0.6超)」では「785 二輪自動車・自動車」、「②中国がやや輸出に特化した品目(0.2超0.6以下)」では「764 通信機器」、「③特化していない品目(-0.2以上0.2以下)」では「334 石油製品」、「④ASEANがやや輸出に特化した品目(-0.6以上-0.2未満)」では「776 熱電子質・半導体」、「⑤ASEANが輸出に特化した品目(-0.6未満)」では「333 原油」であった。たとえば、これらを前項で論じた内容に沿って具体的に考察を行えば、2000年に中国とASEANは、二輪車・自動車と原油の垂直貿易を行い、また、通信機器や石油製品、半導体の水平貿易を行っていたとみることができる。

実際に、とても興味深いことに「0.6超」と「-0.6未満」の上位5品目を確認すると、2000年以降、ASEANから中国へは一貫して「333 原油」や「335 石油残留物・同製品」、「321 石炭」「343 天然ガス」、「231 天然ゴム」などの原材料や一次産品の輸出が多い。他方、中国からASEANへは「764 通信機器」や「893 プラスチック製品」、「655 メリヤス・クロセ織物」、「793 船舶・浮遊構造体」などの工業製品が輸出される、という典型的な垂直貿易のパターンを維持している。

また、中国とASEANの双方が互いに輸出入する品目を意味する「0.2超0.6以上」(中国がやや特化)を見ると、「764 通信機器」が2000年の時点で全貿易の4.6%、2010年に4.0%、そして、2015年には5.8%と大きな割合を占めた。この「764 通信機器」は、2020年には「0.6超」(中国が特化)のカテゴリに移動したため、これが前項で確認した2015年以降の中国優位の貿易割合の上昇に寄与した。

他方、「-0.6以上-0.2未満」(ASEANがやや特化)では、「776 熱電子管・半導体」が2000年に全貿易のうち11.2%、2015年に13.6%、2021年も14.7%と高い割合となっている。2015年以降の水平型の割合の増加には、この「776 熱電子管・半導体」が、2010年の「-0.6未満」(ASEANが特化)のカテゴリから、その後「-0.6以上-0.2未満」(ASEANがやや特化)のカテゴリへ移行したことが影響している。

「-0.2以上0.2以下(特化していない品目)」を見ると、2000年と2010年には「334 石油製品」がそれぞれ全貿易の4.4%と4.8%ともっとも大きなシェアを占めた。その後、2015年には、「752 自動データ処理機械」が3.4%、2020年には「759 事務用機器の部分品」が7.2%、2021年には「728 その他の産業用機械」が1.7%と、このカテゴリに分類される第1位の品目は変化している。このカテゴリには、機械・輸送機器のほか、上位に「057 果実・ナット(生鮮・乾燥)」や「054 野菜(生鮮・冷蔵・冷凍)」などの農産品や、「651 紡織用織



第6図 「垂直型」と「水平型」の貿易額の推移
(資料) UNCTADSTAT から宮島作成。

維の糸」など繊維産業などもランクされているのが特徴である。

4. 2000年以降の水平貿易と垂直貿易の規模の拡大

水平型と垂直型の貿易割合が変化するとともに、2000年以降、中国とASEANとの貿易は、その規模も大幅に増大してきた。その推移を示したのが、第6図である。2000年に水平型に分類できる貿易額は68億ドル、垂直型は134億ドルであった。その後、2010年に水平貿易は1149億ドル、垂直貿易は1778億ドルに、2015年にはそれぞれ2363億ドル、2282億ドルに増加した。そして2021年には水平貿易が4580億ドル、垂直貿易が4054億ドルとなった。

ここで注目すべきは、2015年以降、中国とASEANの貿易構造に、明らかな変化が生じてきていることである。2000年以降、一貫して垂直貿易の規模のほうが大きく、2014年の段階では1443億ドルもの差があったが、第6図が示すように、2015年以降、2016年を除けば、水平貿易の規模が、垂直貿易の規模を上回るようになったのである。

これまでの筆者らの研究から、中国の台頭が顕著となった2000年代、東アジア地域で域内貿易が急拡大したことが明らかとなっている。なかでもとくに、中国とASEANの貿易が拡大してきたことは、前節までに見てきたとおりであるが、それをけん引したのは電子・電気製品を中心とした水平型の貿易であった。ただし、そのようななかにあっても、中国の工業製品の原材料を、ASEANが供給するという伝統的な垂直型の貿易は、一貫して多くを占め、とくに2010年代前半には水平型の規模を大きく上回った。しかし2015年以降、水平型の貿易が垂直型を超える規模を持つようになった。次節では中国の対ベトナム貿易に注目し、その理由を検討する。

第3節 中国 ASEAN 貿易の新局面

1. 対ベトナム貿易の急拡大

これまでの観察を整理すると、2015年以降の中国の対 ASEAN 貿易の変化として、対ベトナム貿易の拡大が指摘できる。前述したように、ベトナムは対 ASEAN 輸出においては第1位、輸入においても第2位で、その増加分はもっとも多かった。次に、対 ASEAN 貿易における水平貿易が垂直貿易を上回るようになったことも明らかになった。2010年代前半に ASEAN の輸出が伸び悩んだ後の水平貿易の増加には、ベトナムの新しい分業パートナーとしての台頭が影響を与えてきたと考えられる。

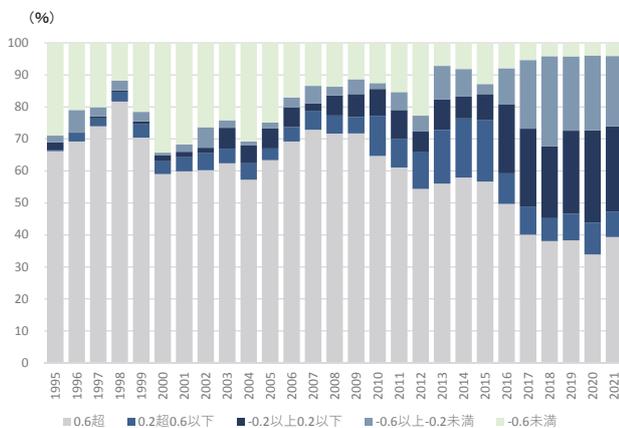
そこで、最後に、このような対ベトナム貿易拡大と水平貿易の関係を考察し、今後の研究課題を提示したい。

中国の対ベトナム貿易は工業製品が多い。UNCTAD-STAT の分類に基づけば、工業製品の輸出シェアは2000年の78.5%から2015年が87.6%、2021年が92.3%に上昇している。同様に、輸入も2000年のわずか7.5%から2015年に62.3%、2021年が83.1%になった。輸入面での工業製品のシェアの上昇は急速である。

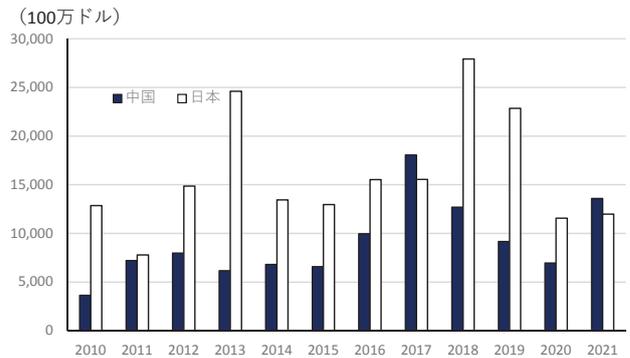
そのなかでも多いのが電子・電気の間接財である。輸出では、2015年の85億ドルから342億ドルに、輸入では、84億ドルから551億ドルに増加した。ASEANからの輸出入に占めるシェアは、それぞれ21.4%から37.6%に、12.7%から42.1%に急上昇した。

このことを、前節と同様に産業内貿易指数の水準に分けてみると、水平分業の割合が急速に拡大していることが明らかである（第7図）。つまり、2015年以降は、中国の対 ASEAN 貿易の増加の一因が、ベトナムとの新しい分業体制にあることが推察される。

注意を喚起しておきたいことは、これまでの工業製品の水平分業が、東アジア域内で多国籍企業が形成するサプライチェーンに中国が参画したものとして捉えられてきたのに対して、2015年以降は、技術力をつけてきた中



第7図 中国とベトナムの貿易構造：産業内貿易指数による分類ごとの割合の推移（貿易総額を100とした）
（資料） UNCTADSTAT から宮島作成。



第8図 ASEAN の中国からの直接投資受入額
（資料） ASEAN 事務局統計から大泉作成。

国企業が主体となって、同地域に新しいサプライチェーンを形成しつつあると捉えることができる点である。

これを裏付けるものに、中国の海外直接投資の増加がある。UNCTADSTAT による中国の対外直接投資は、2010年の690億ドルから2021年は1450億ドルに増加している。2018年、2020年は、世界第2位の投資大国であった。2021年は第4位である。

ASEAN 事務局によれば、中国からの直接投資受入額は年によって増減があるものの、2010～2015年の総計347億ドルから2016～2020年には568億ドルに増加した。2021年は136億ドルと、日本からの120億ドルを上回っている（第8図）。

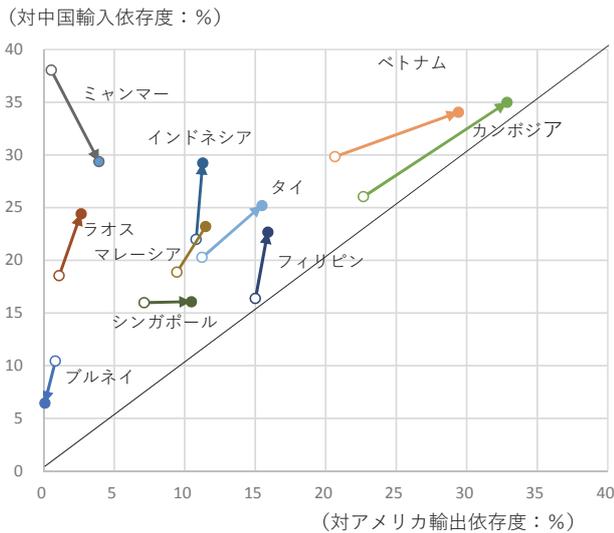
このなかには、中国企業の ASEAN への移転が含まれていることは疑いない。これまで、中国は域内生産ネットワークのなかで最終生産地としての役割を果たしてきたが、中国における賃金上昇や技術レベルの向上、米中対立の回避、安全保障上の事由などから、近年では、中国から ASEAN へと生産ネットワークの最終生産地が移転しつつあるとも指摘できる。このような動きを「チャイナ・プラスワン」と呼ぶ向きもある。

2. 中国→ASEAN→アメリカの迂回貿易

対ベトナム貿易の拡大には、中国発の ASEAN を経由したアメリカへの迂回輸出の進展も影響していると考えられる。

第9図は、2015年と2021年の ASEAN の対中国輸入依存度と対アメリカ輸出依存度を組合わせたものである。いずれの国も対中国輸入依存度が対アメリカ輸出依存度を上回っていることが確認できる（45度線よりも上位に位置）。次いで、矢印の方向に注目すると、ブルネイ、ミャンマーを除いて、中国への輸入依存度を高めるとともに、多くの国がアメリカへの輸出依存度を高めていることがわかる（矢印が右上向き）。とくにベトナム、カンボジア、タイでその傾向が強い。

中国への輸入依存度を高めるなかで、同時にアメリカへの輸出依存度も高める、このことは、ベトナム、カン



第9図 対中国・アメリカ貿易依存度

(資料) UNCTADSTAT から大泉作成。

ボジア、タイで、中国→ASEAN→アメリカという迂回貿易が進展しているということを示唆するものかもしれない。

たとえば、実際にベトナムの対アメリカ繊維関連輸出は2015年の117億ドルから2021年には237億ドルに増加している。そして、ベトナムの対アメリカ輸出を品目別にみると、第4位に「845 その他の衣類」、第5位に「842 女子用織物上衣」、第7位に「844 女子用メリヤス上衣」、第8位に「841 男子用織物上衣」、第10位に「843 男子用メリヤス上衣」と繊維製品が多く、10品目中6品目を占めた。他方、ベトナムの対中国繊維関連輸入は2015年の69億ドルから2021年には148億ドルに増加しているが、輸入別にみると、第4位に「655 メリヤス・クロセ織物」、第6位に「653 人造繊維の織物」などの繊維原材料が多く、中国から原材料を輸入し、アメリカに完成品を輸出するという迂回貿易の存在が見えてくる。

カンボジアの場合も同様である。カンボジアの場合、アメリカの繊維関連製品の輸出が2015年の16億ドルから28億ドルに増加している。2021年のカンボジアの対アメリカ輸出品目の第1位は「845 その他の衣類」の12億ドルで、第3位が「844 女子用メリヤス上衣」、第5位が「843 男子用メリヤス上衣」とやはり完成品が多い。

他方、中国からの繊維関連製品の輸入は、2015年の18億ドルから2021年には39億ドルに倍増している。2021年の中国からの輸入品目の第1位が「655 メリヤス・クロセ編物」で19億ドルと輸入全体の19.0%を占める。第2位が「652 綿織物」、第3位が「653 人造繊維の織物」、第4位が「657 特殊繊維・特殊織物」、第5位が「651 紡績洋繊維の糸」と上位5品目が繊維製品の原材料である。

3. 今後の課題

本稿では、中国の対ASEAN貿易の特徴と変化を貿易データから整理してきた。そこでは、中国側の黒字が続くものの、対ASEAN輸入もベトナムからの電子製品、インドネシアなどからの原材料などが増加しており、比較的安定的に拡大してきたことが明らかになった。とくに前者は、水平貿易に相当するものであり、この水平関係が優位になっていることも明らかになった。

さらにベトナムやカンボジアでは中国から工業製品の原材料を輸入し、最終製品をアメリカへ輸出するという迂回貿易の構造も確認できた。この動きは、米中貿易摩擦や中国の賃金上昇、技術水準の向上などを受けて、これからも加速するものと考えられる。さらに、経済安全保障にかかわるサプライチェーンの見直しなども今後の動きとしては重要となろう。これらの観察には、企業の動向とともに、品目の動きを詳細に追いかけていくことが重要と考える。今後の課題としたい。

参考文献

- ・伊藤亜聖 (2018)「中国が変えるアジア 改革開放と経済大国・中国の登場」遠藤環・伊藤亜聖・大泉啓一郎・後藤健太『現代アジア経済論』有斐閣
- ・後藤健太 (2019)『アジア経済とは何か 躍進のダイナミズムと日本の活路』中公新書
- ・日本経済研究センター (2021)「2033年、中国が世界最大の経済大国に」https://www.jcer.or.jp/jcer_download_log.php?f=eyJwb3N0X2lkIjo4NjI0NSwiZmlsZV9wb3N0X2lkIjo0ODYyNjIifQ==&post_id=86245&file_post_id=86262 (2022年5月30日アクセス)
- ・末廣昭 (2014)『新興アジア経済論 キャッチアップを超えて』岩波書店
- ・宮島良明・大泉啓一郎 (2008)『中国の台頭と東アジア域内貿易 - World Trade Atlas (1996-2006) の分析から』東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点研究シリーズ、No. 1
- ・宮島良明・大泉啓一郎 (2018)「深化・分化する中国・ASEAN貿易」末廣昭・田島俊雄・丸川知雄編『中国・新興国ネクサス 新たな世界経済循環』東京大学出版会
- ・吉富勝 (2003)『アジア経済の真実 奇蹟、危機、制度の進化』東洋経済新報社